

## 親しい人の重み

大蔵中学校 三年 藤崎 康太

ふじき きょうた

僕はこの夏休みの期間に新型コロナウイルスに感染しました。その時に感じたのは、心細さと不安でした。そういった状況になり、僕は改めて、友達など、親しい人の重みに気づけたのではないかと思います。

サッカーの合宿中に発症した僕は、発熱が分かった瞬間に皆とは別の部屋に隔離され、同じく発熱した何人かと一緒に早急に家へ帰りました。当たり前ですが、発熱が分かった途端誰とも話せなくなり、避けられるようになりました。仕方ないと思いつつ、少しショックでした。そのまま家に入ってすぐ部屋で隔離され、友達と会えない状態が十日間続きました。咳はずっと出ていて、加えて後遺症などの心配があつて、どうしても心がマイナスになっていってしまいました。しかし、他のチームメイトがラインで話してくれたり、隔離が終わった後映画に行こうなどと遊びに誘ってくれたりして、励ましてくれました。普段なら何とも思わないことでも、この

時の僕には強い励みになりました。そして幸い後遺症もなく、隔離期間を終え、直接会った友達は、全く変わらず普段通りに接してくれました。大変やったなと気遣いこそすれ、こちらが傷つくようなことは決してされず、うれしくなりました。

今、もしもあの時に別の対応をされていたら、どうだっただろうと考えると、とても傷ついただけだろうと思います。基本的な感染症対策はしていたけれど、かかってしまった。それでも感染したことを「お前が悪い」と責められているような気持ちになってしまおうと思います。そうになると、感染してしまったことは事実なのでどんどん追いつめられ、自分で自分を責めることになったのではないかと感じます。また、僕は後遺症はなかったですが、僕の周りには、今も味覚や嗅覚がなかったり、咳が止まらない人がいます。そんな人たちに、支えてあげべき人が差別的な発言、行動をするとどうなるかというのは容易に想像できます。今の世の中では感染者が増えたため、コロナ感染者に対する差別などはなくなってきたとは思いますが。しかし、隔離生活や後遺症、不安や復帰後への焦りで疲れた心は、冗談のつもりで軽々しく放った

言葉でも簡単に傷ついてしまいます。それが、親しい人、身近な人からの言葉であれば、なおさらだと思っています。僕自身も、今度は友達を助けられる側になりたいと思いました。

コロナ感染者への差別は減っているかもしれませんが。しかし世の中には未だに、数えきれない程の差別が存在しています。そしてその多くが、言ったところでどうしようもないことに対するものだったり、弱った人の心に、さらなる追い打ちをかけておとしめる様なものです。僕は、これらの心ない差別から人を守るのは、その人の親しい人、身近な人なのではないかと思っています。親しい人からの言葉には、他人の言葉の何倍もの重みがあります。その人のことを簡単に傷つけることだってできます。しかし、たった一人の親しい人がずっと味方に来てくれるだけで、どれだけ心が楽になるでしょう。僕はそうやって、身近な人を守れるようになりたいと思いました。